

# オランダの教育について

## ～オランダの教育と日本の教育と対比して学んだこと～

アムステルダム日本人学校  
教諭 岩沢 利恵子

アムステルダム日本人学校概要

○設立について

- 1979年 オランダ日本人学校として設立
- 1984年 現在の校舎に移転
- 1992年 アムステルダム日本人学校と校名を変更

○

### 1. はじめに

オランダに赴任した時に何よりも驚いたことは、多くのオランダ人が流暢に英語を話すことであった。どのような教育をすればこのように英語が話せるようになるのかと、まず英語学習の点で、オランダの教育について興味を持った。私の現籍校は、早い段階から英語学習に力を入れ、英語の指導法について研究をしてくれている学校である。毎週1回、小1から英語の学習をしており、英語学習には親しみを持っていて取り組める児童が多かった。しかし、子ども達が英語を話せるかということ、話せるとはいえなかった。オランダに滞在している間に、なるべく多くの学校を見学して、その指導の工夫について学んでいきたいと感じた。

ユニセフが発表している「子供の幸福度」でオランダが世界一になったことが関係しているのか、オランダの教育が日本のテレビ番組でも紹介されているという。日本の有名な教育評論家が「オランダの教育は日本の先を行っている。」というコメントを寄せて、オランダの教育が紹介されているということだった。そこで日本のテレビ番組で放映されているような「日本の先を行くオランダの教育」とはどのようなものなのかを、研究してみたいと考えた。できる限りオランダ現地の学校を訪問し、オランダの教育と日本の教育をから対比することで、それぞれの良さを学び、帰国後の教育活動に活かしていきたいと考えた。

### 2. オランダ現地校等の視察より学んだもの

#### ①平成24年度

#### ○Theo Thijssen Schoolの見学(平成24年11月5日)

平成24年11月5日に初めて、オランダの現地校の見学に行った。この学校は、初等教育の Basisschool である。オランダの初等教育は4歳から始まる。4歳の誕生日を過ぎると学校へ行くことができ、義務教育は5歳から始まる。そして、12歳までの8年間、Basisschool に行くことになる。1年生は Groep1、12歳の8年生は Groep8 と呼ばれる。Groep1、Groep2 は日本の幼稚園に相当し、Groep3 から Groep8 までが日本の小学校に相当する。

今回、特に教室をじっくりと見学させてもらったのが、Groep1の教室である。日本の幼稚園に相当することもあり、教室内容の様子は日本の小学校とはずいぶん異なっているという印象をもった。秋らしい飾り付けがしてあり、季節にあった学習をしていることが伺える教室で、入っただけでも楽しい雰囲気がある。日本の教室のような机と椅子のセットはなか

った。また、他の高学年の教室には常備されている電子黒板はこの学年の教室にはなかった。教室には、子ども達が描いたと思われる似顔絵が貼ってあったが、色使いが日本の子ども達とは異なり、顔が水色や黄色で、自由な色使いだった。また、Groep1 の教室には、おなかかすいたら自由に食べても良い果物がおいてあった。

今回の見学で感じたのは「子どもの自主性の尊重」である。教師が、子どもに任せても良い所は、完全に任せているように感じた。つつい図工の学習の時間などに絵を描くときに、「本当の色は何だった?」「よく観察して。」などと声をかけてしまうが、オランダの子ども達の自由な作品を見たときに、「きっとこの作品を作ったときに、この作者の子は楽しかったであろう。」と感じられた。出来上がりを気にしてしまい、自分自身が子どもの自主性を大切にせず、作品を作る楽しさを子ども達に味わわせていなかったように感じた。



自由な色遣いの似顔絵

また、Groep1 の教室には、自由に食べて良い果物があったが、高学年は、休み時間にお菓子やお弁当を自由に食べていて、とても驚いた。これも子どもの自主性の尊重なのであろう。しかし、高学年の子ども達の様子からは、「自己責任」ということも感じられた。「お菓子やお弁当を食べたいという子どもの自主性は尊重するが、それらを食べたこと責任は自分で取らせる。」ということなのであろう。

この学校の子供達を見て感じたのは、「自分で考えて行動する。」ことができるようになるのではないかと、ということである。「教師の指示がないと、行動できない。」という子どもや何度も「これでいいですか。」と聞きに来る子どもが日本の学校には、多いように感じる。それは、教師主導の場面が多すぎるからかもしれないと感じた。今後の教育活動に活かしていきたいことをたくさん学ぶことのできた見学となった。



ハロウィンの飾り付けがされたたのしい雰囲気のある教室

## ②平成25年度

### ○OBS Waterrijk (平成25年3月20日)

ユトレヒトにある、OBS Waterrijk を個人的に訪問させて頂いた。この学校も Theo Thijssen School 同様に、初等教育の Basisschool である。今回は実際に Groep3 を担任されている先生のお話を聞きながら見学をすることができ、多くのことを学べた。

#### ・ World Orientation

日本で言う生活科や総合学習のような学習である。イエナプランの学校では、必ず取り入れられている学習である。この学校は、イエナプランの学校ではないが、World Orientation の学習が取り入れられていた。

この日は、牧場の見学に行ったそうで教室では、牧場見学の振り返りが行われていた。学校に戻ってきてから、私たちが見学学習の後に、絵日記を書くように、"Short Story"を書い

たそうである。黒板には、牧場で見たもの、聞いた音、学んだことがウェービング図で書かれていた。この図のことは"Words Spider"と呼ぶそうで、学習の振り返りに効果的なのでよく使うそうである。「"Short Story"が書けない子は、いないか？」と聞くと、「もちろん、いる。」とのことだった。そういう子に対してはどうか支援をするかを聞いたところ「絵が描けるなら、絵だけを描かせる。その子にとっては、文が書けるようになるというのは、次のレベルだから、文が書けるレベルになるよう支援していく。」とのことだった。日本だと、教師主導で何とか書かせてしまうが、オランダでは子ども一人一人のレベルを見極め、それに合った課題を与えており、「個に応じた教育」が徹底されていると感じた。

#### • Thema tafle

季節などテーマにあったものを飾る机がある。テーマに沿った本や飾りなどを家から自由に持ってきて良いそうである。訪問したときのテーマは「海賊」。図書室から海賊に関する本が置かれ、壁には、思い思いに海賊に扮した子ども達の絵が貼ってあった。この Thema tafle は、World Orientation の一環で行われている。

#### • ワークブックについて

オランダでは、算数などは主にワークブックで学習が進められている。このワークブックの選定は、学校に一任されている。学校ごとにコンサルティング会社がついており、その会社がその学校の教育方針にあったワークブックを紹介してくれる。また、このコンサルティング会社がADHDなどの対応が難しい子どもへの支援の仕方などのサポートもしてくれる。

算数のワークブックは一人2冊ずつ用意されていた。1冊は表には、基礎的な問題、裏には発展的な問題が掲載されていた。子ども達は、まず表の基礎的な問題を解き、それが終わると裏の自分のレベルにあった発展問題に取り組む。難易度が星の数で表されており、自分に合った発展問題に取り組む。さらに、その発展問題も終わってしまう子は、2冊目のワークブックに進む。それも終わってしまう子のためには、エクストラのプリントが用意されていた。

先生に話を聞くと、「子ども達に勉強する楽しさを感じてほしい。子ども達に問題をどんどん解けることは楽しいことだから、自分のレベルにあった問題にどんどん取り組ませる。もちろん、自分のレベルより難しい問題にも自由に取り組んでかまわない。何よりも、楽しく学ぶことが大事。」と話してくれた。

教室には、コンピューターが4台有り、ゲームを通して算数を学ぶことができる。課題が早く終わった子から、コンピューターを使うことができる。一人1日15分はコンピューターを使えるというルールがあり、課題がなかなか終わらない子にも、1日15分はコンピューターに触れられるようにしている。

オランダにも学習指導要領のように、「この年齢はこの学習を身につける」という目安のようなものはあるそうだが、そんなに多くはないそうで、比較的自由に学習が進められるそうである。

#### • Study dag

Study dag について、話を聞いてみると 私たちの「研修」と同じであった。対応の難しい子どもへの対応の仕方を学んだり、新しい教育の方法などを学んだりする機会のことを言う。今年度は、学校で"Vocaburaly"の研究をしているそうで、"Vocaburaly"の専門家から



指導法などを学んだそうである。

#### ・電子黒板

この教室にも電子黒板が設置されていた。とても使い勝手がよく、"Reading"の学習などで、読んでいるものを提示できるので、子ども達の学習の理解にとっても役立っているそうである。幼稚園などでは導入されていないが、小学校では、ほとんど電子黒板が導入されている。



#### ・ School Report

一人一人のレポートは多くの項目に対して細かく評価とコメントがある、とても丁寧なものである。一人につき、最低でも1時間半はかかり、準備がとても大変と話してくれた。最初のページは、子ども自身の自己評価と教師の評価が並んでいる。このページについて聞いてみると、まずは子ども達に自己評価をさせる。この時は、「間違いはない。自分の思った評価を自分で選ぶように。」と話そうである。自分に対して甘い子は、すべて「よくできた。」になり、自分にきびしい子はとてもよくできているにもかかわらず「あまりできていない。」を選んでしまが、あくまで子ども達の意見を尊重しているようだ。そのため、教師の評価と本人の評価が全く違うような子もいるが、子ども自身の考えなので、そのまま保護者に渡すそうである。

教師の話からは、子ども達に学習を楽しんでもらいたいという思いが強く感じられた。また、子ども一人一人の能力に応じ到達目標が細かく設定されており、個に応じた学習が徹底されており、学ぶべき点が多くあると感じた。

### ◎British School(平成25年11月4日)

現地校視察研修で British School を訪問した。昨年度の校内研修、および3月に訪問したオランダ現地校の様子と対比しながら見学することができた。

#### ・ Science Week

私達が訪問した週は丁度、Science Week にあたっており、全校生徒がホールのようなところに集まり、理科の実験の見学をしていた。子ども達は、とても落ち着いて実験の様子を見ていた。



その後、いろいろな教室を訪問すると、Science Weekらしく、様々な実験をしていた。先生に話を伺うと、「Science Week は、実験道具を各教室に配置し、子ども達が移動をする。その方が準備が効率的だからだ。」と話していた。日本では、理科離れが懸念されているが、こちらでもそのような理由でされているのか、それとも恒例の行事になっているのかをお聞きすればよかった。

#### ・ 教室掲示

子ども達の作品などを、とてもきれいに掲示していた。先生が作ったであろう台紙と、子ども達の作品を合わせて一つの大きな作品のようにになっているものが多かった。また、ローマについて学んでいる部屋があったが、その部屋の掲示もローマをテーマにしたローマモザイクが飾られていた。教室前方には、学習の際に気をつけるキーワードが書かれた物が掲示されているクラスが多かった。カラフルで、よく目に付く掲示で、今後、自分の学級にも取り入れていきたいと思った。よく見かけたのが、「リメンバーリュックサック」

である。先生にお聞きすると、インターネットなどで画像が容易に手にはいるし、算数学習で大切なことなので、多くの教室に掲示されているとのことだった。

## Remember Rucsac



Read (読む)

まず、問題をしっかり読みましょう

Understand (理解する)

何を聞かれているか理解しましょう。

Choose (選ぶ)

どの方法で答えを出すのか選びましょう。

Solve (解く)

問題を解きましょう。

Answer (答える)

答えを書きましょう。

Check (確かめる)

本当に正しい答えか確かめましょう。

OBS Waterrijk 見た Thema tafle ようなものもあり、私たちが訪問したときには「ヴィクトリア朝」の古い道具や本などが展示してあった。



Before you speak THINK  
 T... Is it True?  
 H... Is it Helpful?  
 I... Is it Inspiring?  
 N... Is It Necessary?  
 K... Is it Kind?

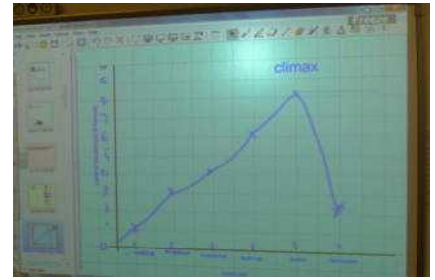
### ・電子黒板

オランダ現地校と同様に、電子黒板が使用されていた。私たちが訪問したクラスでは、電子黒板とホワイトボードを併用していた。最近では、各教科書会社がデジタル教科書を出しており、算数の図形の展開図の学習などには大変効果的だそうである。日本でもデジタル教科書が販売されている。現籍校でデジタル教科書を用いた授業実践の研究を行ったことがある。子ども達に情報を視覚的にとらえさせることは大変効果的であったが、デジタル教科書も電子黒板も高価であるので、全教室に配備するのは難しそうであった。しかし

ながら、実際に授業の中で活用する様子を見学していると、デジタル教材の教育効果は高いことを改めて実感した。



・ホワイトボードと電子黒板の併用



・電子黒板に表示された感情曲線

## ○平成25年度 現地校等視察 まとめ

- ・「子ども達の自己責任の上での自由・自主性の尊重」
- ・「個に応じた教育」
- ・「子ども達に学ぶ楽しさを味わわせたいという教師の思い」

昨年度、現地校、ユトレヒト教材展、教員養成校（ipabo）を見学する中で、強く感じたのは子ども達の自己責任の上での自由であった。今年、2校を見学させて頂いて感じたのは、「個に応じた教育の徹底」「子ども達に学ぶ楽しさを味わわせたいという教師の思い」である。3月には、ユトレヒトの小学校を見学させて頂き、さらに担任の先生に話を聞くことができた。学習の方法や研修では多くの共通点があった。先生から話を聞く中で感じたのは「個に応じた教育の徹底」「子ども達に学ぶ楽しさを味わわせたいという教師の思い」である。これまで、自分がどれだけ「子ども達の学ぶ楽しさ」を考えられていたか、またどれだけ「個に応じた教育」を心掛けていたかを反省するきっかけとなった。

これまで、私は、学習の中で「個に応じた教育」というと、進度の遅い子のケアをすることに重点を置きすぎていたように思う。算数などでは、進度の遅い子のケアにあたり、進度の速い子については、「くり返しドリル」などを何度もやって待ってもらうことが多かった。しかしながら、今後は、一人一人の能力に合わせた到達目標を考え、その到達目標に沿った課題を用意しておきたいと考えた。オランダの学校のワークブックのように、初めから「進度別」になっている教材はないため、教師側でより深く教材研究をすることが求められると考えられるが、「個に応じた教育」を行うことで子ども達に、「学ぶ楽しさ」を味わわせることもできるであろう。進度の遅い子にも速い子にも学習に対する充実感、達成感を味わわせたい。また、「基礎的な学力の保証」は絶対であるので、進度の遅い子にも確かな学力をつけていくには、どのような手段が有効かを引き続き学んでいきたいと思う。比較的人数の少ない日本人学校では、個に応じた到達目標を設定し、学習を進めていくことは可能であると考えられる。ぜひ、今後実践していければと思う。

平成25年度は、オランダ現地校と British School を参観させて頂いたが、どちらかというとも British School は、日本の学校と雰囲気が似ていると感じた。制服をしっかりと着ていたり、教室に来校者があると、来校者の方に体を向けてしっかりと挨拶ができたりしていた。

また、落ち着いた雰囲気での学習に取り組んでおり、オランダ現地校のような自由な雰囲気はなかったように思う。しっかりと統制がとられているようにも感じた。ただ、エクストラは払うものの、個別の語学学習のケア対策がとられていたり、受けたい授業を選択することができたりするところは、オランダの現地校でも感じた「個に応じた教育の徹底」「子ども達に学ぶ楽しさを味わわせたいという教師の思い」を感じた。日本の学校では、教育制度の相違から真似できないところもあるが、まずできるところから、良さを取り入れた学習を展

開していきたいと感じた。

## ◎Willem Alexander School(平成26年11月3日)

現地校視察研修で Willem Alexander School を訪問した。校長先生自ら校内を案内してくださったり、学校の概要について詳しく説明をしてくださったので、大変実り多い研修となった。

### ・ Willem Alexander School の概要について

Willem Alexander School はもともとは、4歳から6歳までの学校であったが、現在は、4歳から12歳の子ども達が就学している。現在430名の子ども達が学んでおり、1クラスは、25～30名。各クラスの担任は2人ずつで、曜日ごとに引き継いでいる。

プロテスタント系の学校ではあるが、80パーセントが無宗教の家庭であり、その他は様々な宗教の家族が混在しており、学校教育上、ほとんど宗教色はない。

以前は、画一的で、非常に厳しく校則や学習活動が決まっていた学校であるが、現在は「子ども達の幸福」が学校教育の最大の目標になっている。勉強がよくできることや高いレベルの学校に進学することを目標とするのではなく、「子ども達が心から幸せだと感じながら、生きる人生」を歩めるように学校教育を進めている。そのために、「自分で自信を付けていく。自分に誇りを持つこと。」を大切にしている。しかしながら、家庭は、日本と同じように高い学力を身につけることや、子ども達の目の前の状態ばかりに目を向けがちである。そのために、入学時の学校説明会や保護者会等で「子ども達の幸福」について、学校長から伝え続け、学校理解と家庭の協力を得ようと努力をしている。

### ・カリキュラム概要

大きく分けて、4歳～8歳（低学年）、8歳～12歳（高学年）の二つのパートに分かれている。低学年と高学年で校舎が分かれている。4歳では"Playing"、12歳では、"On the studying by yourself"を目標としており、4歳から12歳までの間に段階的に学習のレベルをあげていく。4歳(Groep1)では、"Playing"と"Working"が一連の学習となっているが、日本の小学1年生にあたる Groep3 からは、"Playing"と"Working"が分かれていく。また、Groep3からは、"Own table"、"Long work"、"Cocentrate reading"が始まる。日本の幼稚園にあたる、Groep1、Groep2では、子ども達は様々な遊びを通して学んでいく。1年生にあたる Groep3からは、学習が始まっていく。この点では、日本と大変似ていると感じたが、Groep3もまだまだ遊びを通して学びを重視しており、午後には"Playing"の時間をもうけているそうである。英語は Groep1 から学習している。(Groep1は30分)

### ・遊び"Playing"を通した学びの場

一つの部屋の中に、たくさんの遊びの場が用意されている。単なる遊びの場ではなく、遊びを通して学びの場が用意されている。この日は、フォークや筆を使い、絵の具で遊ぶ場等が用意されていた。子ども達は、自由に好きな場所で遊ぶことができる。ただこの遊びの場には定員がある。定員を表示したボードがあり、子ども達は、そこに自分のネームカードを貼ってから、遊びの場に行く。次の遊びの場に移る場合には、またそのボードの前に行き、空いている遊びの場にネームカードを貼り直してから移動をしていた。秩序

を乱す子もおらず、真剣に自分の気に入った遊びをしている姿が印象的であった。



・ Instruction of Talking

OBS Waterrijk で見た Thema tafle と似ているが、学校内共通の「今月のテーマ」に関するものが教室の角などに並べられている。私達が見学に行った際のテーマは"Herfst (秋)" で、玄関装飾、図工作品、教室掲示には、秋を感じさせる物が多かった。また、"Herfst"の頭文字の"H"が付く言葉を学んでいる教室もあった。



・ 朝学習

毎朝、朝学習の時間があり、一定時間、自主学習に取り組んでいる。Groep3 は、10分間、Groep4 は、20分間と学年が上がるにつれて、学習時間は長くなる。学年に応じた学習時間で、集中して静かに学習に取り組む習慣が少しずつ身に付いていく。継続的な自習学習は、自分だけで問題を解く力、友達と相談して問題を解く力などを養うことをねらいとしている。最低限終わらせなければならない課題の他に、能力の高い児童にはエキストラの課題も用意されている。

・ 学習用具の活用

各教室には信号、タイマー、サイコロ、ボード、Special Table がある。



## 信号

- 赤：話してはいけない
- 黄：隣の人と小さな声で相談をしても良い
- 青：話しても良い                    ということを提示している。



## タイマー

残り時間を表示し、児童が時間内に課題を終わらせることができるように支援をしている。自分でタイマーで時間を確認し、自分の課題を終わらせることで、時間に対しての感覚を身につけることをねらいとしている。また、椅子に熊のぬいぐるみが置いてある時には、"Just waiting (ただ、待つ)"ことを提示している。

## Special Table

3～4人が集まって学習できる机がある。ここは、分からないところがある子や、詳しい説明を要する子に個別に教える机である。Willem Alexander Schoolにも、支援を要する子がいる。特別な教室で学習するわけではなく、各教室で勉強している。支援を要する子に、どのような支援をしたらよいかは、専門の教師から指導がある。

## ボード

何の学習をしなければいけないのか、絵で分かるようになっている。



## 電子黒板教材

電子黒板で表示するために自作した教材類は全て教科ごとにサーバーに保存されており、教師は誰でも自由に使うことができる。教材を共有することにより、教材研究の時間が短縮されたそうである。

## サイコロ

児童の机にあり、静かに意思表示のために使用する。このサイコロを使用することにより、児童は朝学習に話しをすることはないそうである。

- 赤：集中しているので、話しかけないでほしい。
- ？：先生に質問があります。
- 緑：話しかけても良い。



## ・ Special Program

総合的な学習の時間、またイエナプランの World Orientation と似ている学習である。各学年ごとに、テーマを決めて、詳しく調べたり、見学に行ったりして学習を深める。今年度は、Groep3 が、"Pirates"と"Wild Animals"、Groep4 が、"Art"である。Groep5 は、保護者による"After Team"というボランティアグループと一緒にナチュラリスなどの校外学習に出かける ("See it real."). その後、パワーポイントなどを使って、クラスメートや保護者に学んだことのプレゼンテーションを行う学習である。

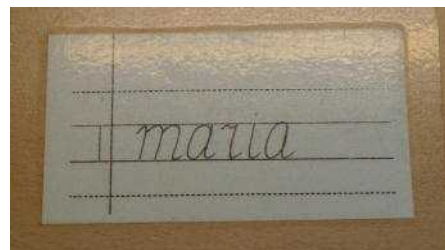
## ・ 個人用袋

教室に日本のようなロッカーはない。それぞれ個人のマークの入った袋を持っていて、子ども達はこの中に、自分の上着などを入れて、廊下にあるフックに掛けている。個人のマークがついているのは、まだ文字が読めない Groep1 でもどれが自分の袋がわかるようにするためである。また、自分のフックにも袋と同じマークがついている。袋に入れてフックに掛けるのは、シラミ対策だそうである。



#### ・机の名札

Groep3 の子ども達の机には、名前シールが貼ってあった。どれが自分の机かを見分けるだけではなく、シールを見て正しく自分の名前が書けるよう工夫されていた。



### ○平成26年度 現地校等視察 まとめ

- ・「学校における子ども達の幸福」
- ・「全ての教師で、学校をどう盛り上げていくかを考える。」

Willem Alexander School では、自主学習や、World Orientation のような、Special program があり、イェナ・プランの教育方針を取り入れている学校であると感じた。子供たちが学校で幸せを感じてほしいという校長先生の思いを受けて、どの先生方も生き生きと子ども達と過ごす姿が印象的だった。この学校では、子ども達だけではなく、先生方も幸せに働いているように感じられた。案内をして下さった先生は、「彼女（校長先生）が来てから、この学校は、本当に変わったのよ。」と話してくれた。校長先生は、学校の新しいビジョンをいろいろお持ちで、これからのプランについてお話くださった。私は、このような学校で働いてみたいと感じながら見学した。

しかしながら、この学校にも問題がないわけではなかった。オランダには、子ども達の進路を決定する CITO テストがある。この CITO テスト対策のために塾のようなものに行ったり、家庭教師をお願いしたりする家庭がある。学校からは、CITO テストのためのトレーニングだけを積むことに何の意味があるのか、テストが全てではないことを保護者に話しているが、そこはなかなか理解してもらえないようである。オランダの学校にも日本の学校と同じような競争が起き始めている。

校長先生が「この学校は全ての教師が、この学校をどう盛り上げていくかを考えている。日本ではどう？」と質問された。その時、果たして自分は学校全体のことを考えて動いていたのだろうか、自分の学級、学年ぐらいのことぐらいしか考えられていなかったのではないかと感じた。全ての教師が学校全体を良くするにはどうしたら良いかを考えれば、自ずと学校は子ども達が幸福感を感じる場所へとようになっていくのではないだろうか。さらに全ての教師が子ども達に学校で幸せを感じてほしいと願う学校で学べる子ども達は、幸せに違いない。

26年度の現地校視察では、自分の子ども達や学校に対する意識を変えていく大切さをさらに強く実感した。「学校における子ども達の幸福」、「全ての教師で、学校をどう盛り上げていくかを考える。」ことの大切さを学んだ。様々な教育制度が異なるオランダと日本であるが、教師の持つべき意識は同じであると感じた。今回学んだことは、今後の教育活動

に必ず活かしていきたい。

### 3. その他の学校の見学

#### ○ipaboの見学(平成25年1月19日)

平成25年1月19日に、アムステルダム日本人学校のそばにある"ipabo"の見学に行った。"ipabo"は、オランダの高等教育 Hogeschool (het hoger onderwijs)にあたり、教師になるための専門教育が行われている。オランダでは、HBO (Het hoger beroepsonderwijs) と大学 (Universiteit) が高等教育にあたる。HBO は beroep (= business, occupation) という名が示すように、高等職業学校である。大学がアカデミックな教育を基本としているのに対して、HBO では実務に直結した専門教育が行われる。学校の先生になる人、セラピストになる人などは HBO で教育を受ける。大学に比べて、HBO は学校の数も多く、また履修できる科目も多岐に渡っている。

1月19日は、Open dag で、"ipabo"に入学を希望する学生が多く訪れており、説明も "ipabo" では教師になるためにどのような勉強をするのかということが中心であった。今回、私は"Nederlands"と"Aardrijkskunde"の説明を聞かせて頂いた。

"Nederlands"は、私が大学で学んだ「国語科教育法」と似ている教科であった。文法的に正しいオランダ語を学ぶ学習である。"Leren lezen" "Spelling" "Woordenschat" "Taal bestchouwing"などの教科の説明があった。中でも興味深かったのが、"Leren lezen"である。これは、単語の理解を深める学習である。単語の初めと終わりは正しいが、その他の文字の並びのおかしい単語が提示されても、オランダ語を確実に理解していればその単語を読むことができ、意味も理解ができるようになるそうである。国語の漢字のへんとつくりの意味を理解していれば、その漢字を知らなくても意味や読みを予想できるのと似ていると感じた。

"Aardrijkskunde"は、オランダの地理や工業の勉強をする学習で、日本の社会の学習に当たると思われる。ここでは、"ipabo"でどのような学習をするのかの詳しい説明はなく、テキストやオランダの年鑑のようなもの (De Grote Bosatlas) が配られ、Groep 6 (日本の小学校4年生)で行われている学習を体験させてもらった。テキストには、畑で綿花ができ、それが加工工場に運ばれ、さらに縫製工場に運ばれ、最終的に消費者に届くという「ジーンズが消費者に届くまでの流れ」が載っていた。その後、私たちのグループには"Lays"のポテトチップが配られ、ジーンズと同じように、オランダの年鑑を参考にポテトチップが消費者に届くまでの流れを考えるように指示があった。他には、台ふきん、缶詰などを渡されているグループもあった。同じグループの女性が中心となって、どんどん考えてくれた。彼女は、年鑑の農業のさかんな地域の載ったページを見て、そこから"Lays"の工場のある場所を結びつけて、「"Lays"の工場に近いこの辺りでじゃがいもを作っているのでは。」と先生に質問をしていた。すると先生は「じゃがいもは粘土質の土地で育つ。」とアドバイスをくれ、「それなら、じゃがいもは育つのは、この辺り。」と配られた"lays"のポテトチップのじゃがいもの産地を割り出していた。この学習は、すでに学習したことを活かして、論理立てて思考する力がつくであろうと感じられた。

今回は、入学希望者向けの Open Dag であったが、機会があれば、実際に学生が学んでいる所などを見学させてもらったり、質問させてもらったりできればと感じた。



### ◎Gerrit Rietveld Academieの見学(平成26年7月6日)

これまでオランダの大学を見学したことがなく、芸術大学なら、言語の問題もなく、大学生の学習の様子に触れることができるであろうと感じ Gerrit Rietveld Academie の卒業制作の見学に行った。Gerrit Rietveld Academie では、思いがけず、2人の日本人留学生に話を聞くことができた。2人とも、ジュエリー学科の学生で、日本の美術大学を卒業して、一度就職をしたが、もう少し勉強をしたいという思いをもち、オランダに来た留学生であった。

フジマキ ミオさんは、素材の二面性、見る人によって素材の可能性が変わること、ジュエリーとしての素材の可能性について学んだ方だった。ジュエリーは、恒久的な素材を使わなければならないという考えから脱却するために、チーズで作ったネックレス、2～3週間かけてかびさせたパンのネックレスを作り、展示していた。また、洋服にネックレスのように貼り付けた金色のテープ、また、物を貼り合わせるために使われた金色のテープ。金色のテープという同じ素材なのに、用途により、素材の可能性が広がることを表現してしようとしていた展示も興味深かった。見ていて不思議な物ばかりなので、「どうして、このようなものを作ろうと思ったのか。」などたくさんの質問をしたのだが、どの質問にも明確に答えてくれた。相手がオランダ人であっても、堂々と作品の意図するところを話していた。どうして、このようにはっきりと自分の作品の意図するものを話せるのかを聞いてみると、これまで自分の作品について、先生や仲間と何度も何度も討論を繰り返してきたからだそうである。時には、相手に自分の意見に納得してもらえないこともある。でも、自分の思いをくり返し伝える中に、お互いの作品にかける思いを分かり合えるようになってきたようだ。

ウンノ ミサトさんは、ヨーロッパには、たくさんの面白い形をした香辛料があることに興味を持ち、それを使って何かできないかを学んできた方だった。ミサトさんの卒業制作は、香辛料に色をつけてストッキングに入れ、そのストッキングを曲げたり、ねじったりしていろいろな形を作ったものだった。見る人によっては、動物に見えたり、赤ちゃんに見えたりする不思議な作品だった。彼女もまた、自分の作品について質問されると、日本語でも、英語でもしっかりと答えていた。

オランダ人は討論が好きだそうだが、日本人は、討論となると一歩引いてしまう感がある。しかしながら、彼女達は、話さなければ何も始まらない世界に自分自身を置くことで、自分の思いを表現する術を学んだのであろう。彼女達からは、自ら望んで学ぶ楽しさ、また、自ら学んだことに対する自信を感じ、頼もしく思った。



#### 4. 教材展の見学

### ◎ユトレヒト教材展(平成25年1月25日)

2年に一度行われるユトレヒトの教材展に行かせて頂いた。会場には多数の来場者があり、教師だけではなく、"ipabo"のような Hogeschool の学生も来ていた。オランダの教材はどのようなものか、とても楽しみであった。

日本の学校には一校に一台ぐらしか設置されていない電子黒板を紹介しているブースが多く見られた。子ども達でも容易に操作できるものも多く、オランダの学校ではすでに根付いている感があった。

その他、計算のドリルなどは、日本の物とは異なり、知能テストのように少し考えないと解けない問題が多かった。クラスの子ども達に解かせてみると、問題文がオランダ語であっても、問題の解き方を理解し「とてもおもしろい。もっと他のプリントもやってみたい。」と次々に問題に取り組んでいた。日本では、同じような問題を何回も繰り返すドリルが多いが、オランダのドリルのように少し考えないと解けない問題の方が、子ども達の知的好奇心を刺激するのかもしれないと感じた。



電子黒板



たくさんのマペット



カラフルな人体の模型



## ○ユトレヒト教材展(平成27年1月30日)

2年に一度のユトレヒトの教材展に行った。2年前に比べるとデジタル機器やデジタル教材に展示が増えて、書き込みタイプのワークブックなどの展示が大幅に減っていた。交流学習で、オランダ現地校に行った児童が「メルケルバッハ校では、算数をタブレットを使って勉強していた。」と話していたことを思い出した。日本は、デジタル教材の普及については、オランダに遅れを取っていると言える。何もかもデジタル教材にするのが良いとは思わないが、教科によってはデジタル教材の方が効率的な学習もあるので、そういった学習には積極的にデジタル教材を取り入れていければと感じた。



## 5. おわりに

現地校等の視察、研修会等を通して、オランダの教育について学んできた。オランダの教育は、日本の教育と比べると、進んでいる事が多いのは事実であった。デジタル教材の普及だけでなく、イェナプラン教育、モンテッソーリ教育、ダルトンプラン教育というオルタナティブ教育も普及して

いる。これらオールタナティブ教育を日本の現籍校で実践できるかというそれは残念ながらできない。日本の教育制度とオランダの教育制度では大きな違いがあり、日本の教育にはオランダほどの自由は認められていない。そこで、現地校を視察したり、教材展を見学したりする中で、自分自身が掴んだもの、「子どもの自主性の尊重」「個に応じた教育」「学校における子供の幸福」「子ども達に学ぶ楽しさを味わわせる。」をこれから実践していきたいと思う。

英語の学習については、残念ながら、実際にどのように学んでいるかを研究することはできなかった。英語とオランダ語の歴史を遡ると、同じインドヨーロッパ語族の西ゲルマン語にルーツがあることから、文法や単語に似通った点があり、オランダ人は比較的習得しやすいのではないかと考えられる。EU が「母国語プラス EU の 2 カ国語以上の言語の習得」を提唱していることもあり、どの学校でも英語学習に比較的力量を入れて、取り組んでいるようである。

また、先日イエナプラン教育について学ぶ機会を得た。イエナプラン教育の考え方には共感できるものがあった。その中の一つがマルチプルインテリジェンスである。人間の知性には 8 つの種類があり、一人ひとりの人間は、そのうちいくつかの組み合わせを個性として持っている。これまで学校では、この 8 つの種類の中のうち、「言語スマート」「数理スマート」だけを特別扱いし、読んだり書いたり計算したりするのがうまい子を「できる子」として見てきた。そうではない子はいろいろな力があるのに顧みられることがなかった。これからは、子ども達の様子を 8 つの知性の観点から見て、ポジティブに知性を伸ばしていくという考えである。これまで、「できる子」だけをほめていたのではないだろうかと反省し、これからは、子ども達を多面的に見ていきたいと感じた。

オランダの教育に触れ、日本では気が付けなかった数々のことを、これからの教育実践に活かしていきたいと思う。

参考文献：『愛をもって見守る子育て』 リヒテルズ直子著